蘇武李陵詩考

——離別詩の一つの源泉——

松原朗

（一）

「蘇武李陵詩」あるいは單に「蘇李詩」と稱される一群の詩がある。敗軍の將となってそのまま匈奴に仕えた李陵。漢の使節となって匈奴に使いし、そのまま北海（バイカル湖）の畔に十數年に亘って抑留された蘇武。昭帝の始元六年（前八一年）、漢と匈奴との和義が成り、蘇武の歸國が叶うに當たって、李陵は置酒して蘇武を祝福し、「域を異にする人、壹たび別るれば長へに絕えん」と惜別の思いを吐露して、

徑萬里兮度砂幕　萬里を徑り砂幕を度る
爲君將兮奮匈奴　君が將と爲り匈奴に奮う
路窮絕兮矢刃摧　路窮絕して矢刃摧だけ
老母已死　老母已に死す

と歌い、涙を流しながら蘇武と訣別した（『漢書』卷五四「李廣蘇建列傳」）。

この李陵の歌は、眞實彼自身の作か否かは問わないとしても、七言を基本に「兮」字を插んだこのいわゆる楚歌の形式は、前漢のこの時期の抒情詩の形態として最も違和感のないものであり、しかも後漢の班固（三二―九二）の『漢書』に既に收められていることも、この歌の十分の古さを保證するものとなっている。

一方、本稿が取り上げる蘇李詩は、整然とした五言詩であり、先の楚歌とは全く異質なる形式を採っている。しかも確認できる蘇李詩の初出が、梁の『文選』まで下ることも注意

雖欲報恩將安歸　恩に報いんと欲するも將た安にか歸らん

が必要である。『漢書』所引の李陵歌と、いわゆる蘇李詩とは、形式においても、また恐らくは成立時期についても、全く異なる事情にある作品として取り扱う必要があるだろう。

なお本稿は、蘇李詩の眞僞を辨じようとするものではない。またその成立時期の考察を目的とするものでもない。ここでの關心は、蘇李詩が一體いつから、またどの程度において魏晉南北朝期の離別詩の形成に影響を與えたのかを確認することにある。從って、その確認に必要な限りにおいて、蘇李詩の成立に關わる事情を整理することになる。

蘇李詩の成立に關わる研究は、今日に至るまで繼續的に發表され[1]、それを後人の僞作と見るもの、李陵とは無關係に成立した詩篇が李陵（また蘇武）の名の下に傳承（僞託）されたと見るもの、さらには李陵と蘇武の眞作と見るもの等[2]、その見解も多岐に渡る。本稿では、筆者が最も穩當と考える逯欽立「漢詩別錄―（辨僞第一）蘇李詩」（同『漢魏六朝文學論集』陝西人民出版社、一九八四年）の見解に、原則として從いたい。

いわゆる蘇李詩を記錄した確認できる初出文獻は『文選』であり、卷二九所收の李陵「與蘇武三首」（初句はそれぞれ良時不再至・嘉會難再遇・携手上河梁）と蘇武「詩四首」（初句はそれぞれ骨肉緣枝葉・黃鵠一遠別・結髮爲夫妻・燭燭晨明月）の都合七首である。その後、北宋の韓元吉の原篇とされる『古文苑』（現行本卷八）に「錄別詩」八首、蘇武「答詩」「別李陵」の都合十首が見える。また逯欽立の考證に據れば、『古文苑』卷八の孔融「雜詩三首」も唐代には李陵詩と目されていた詩篇であり、ここにさらに『文選』李善注や『北堂書鈔』に所引の二篇の殘句を加えて、現在確認できる蘇李詩は、二二篇となる。以下、蘇李詩についての逯欽立の書誌的見解を、三點に整理する。

①「蘇武詩」は、梁代に「李陵詩」から派出した

李陵詩に對する言及は、すでに宋齊時代より散見されるが、蘇武詩への言及は梁に至って初めて現れる（『文選』卷二九「蘇武詩四首」）。しかも梁代においても、蕭子顯『南齊書』文學傳論や、江淹「雜體詩」では李陵詩のみを取り上げて、蘇武詩には言及しない。――こうした事實は、「李陵の詩集」が先に存在し、蘇武詩は梁代になって「李陵の詩集」から派出したことを示唆するものであり、その一つの證據として、その後も屢しば兩者の混亂が起こっている。例として、『文選』では蘇武詩として收める「骨肉緣枝葉」詩は、『初學記』卷十八では

李陵「贈蘇武詩」に作る。また江淹「雜體詩」擬李陵詩には「結髪不相見」の句が含まれるが、これは『文選』が蘇武詩として收める「結髪爲夫妻」詩に擬したものである。このような混亂の存在は、宋齊以前には蘇武詩が李陵詩と未分化の狀態にあったことを窺わせている。

②「李陵詩」は、後人の僞作ではない。

蘇軾は「正齊梁小兒所擬作、決非西漢人」（「答劉沔都曹書」『蘇東坡集・後集』卷九）として僞作說を唱える。しかし意圖された僞作であれば、李陵の經歷と努めて矛盾のないように作るのが作法である。しかるに李陵詩の內容は雜多で相互に矛盾することが多く、一人一時の制作ではないことは明白であり、僞作の意圖を認めることはできない。(3)

③「李陵詩」は、後漢末期に、交州避難民の體驗の中から成立した。

「李陵詩」は、後漢末期に戰亂を避けて交州（現ベトナム北部）に移動する難民の體驗を反映している。「燭燭晨明月」詩には「山海隔中州」の句があるが、「中原」を「中州」と稱するのは後漢の後半期に特徵的である。またその「山海」、及び「日南」（『古文苑』李陵「錄別詩」の「有鳥西南飛」詩）の語に注目すれば、「日南」は交州を指し、「山海」は交州に至る避難の經路を指す。

筆者は、逯欽立の①②の見解に贊同する。また③については後漢末期の成立については適當と考え、(4)「交州避難民の制作」については判斷を保留したい。かくして蘇李詩については、後漢末期の無名氏の手に成る、李陵の名の下に傳えられた作品群、(5)とする認識をもって本稿の基本的な立場とする。（なお逯欽立の見解に據れば、宋齊以前は蘇武詩と称するものは存在せず、總て李陵詩と呼ぶべきことになるが、本稿では慣例に從って、特に必要がない限り「蘇李詩」の通稱を用いることにする）。

（二）「蘇李詩」の發見

蘇李詩を最初に記錄した文獻は、『文選』である。しかしその存在について言及したものは、それ以前にもあった。『文選』編集の時点から約百年遡った顏延之の「庭誥」（『太平御覽』卷五八六所引）である。

「庭誥」の成立は、元嘉十一年（四三四）以後の七年間と推定される。『宋書』卷七三「顏延之傳」に據れば、「（顏）延之與（車）仲達世素不協、屛居里巷、不豫人間者七載。……閑居無事、爲庭誥之文」とある。その顏延之の屛居とは、右

記の七年間のことである（曹道衡・劉躍進『南北朝文學編年史』人民文學出版社、二〇〇〇年）。

「庭誥」は、李陵詩について次のように記す。

> 逮李陵衆作、總雜不類、元是假託、非盡（李）陵制。至其善篇、有足悲者。

顔延之は、この「庭誥」執筆の時點（四四〇年以前）で、すでに「李陵衆作」と稱する作品群の存在を認知しており、なおかつ相互に雜駁で不統一な内容の故に、李陵に假託された詩が多く含まれていることを指摘している。

顔延之を發端として、それ以降、李陵詩に關する言及は着實に增加している。この事實は却って、顔延之以前には、李陵詩が殆ど注目されることもなく放置されていたことを意味するであろう。假に李陵詩がこれ以前にも通行していたとすれば、そこに信じられた前漢時代の成立という際立った古さの故に、また李陵という著名な人物の故に、必ずや李陵詩に關する言及が繰り返され、またその詩を典故とした詩篇の制作もあったと見るのが自然である。[6] しかしその痕跡が全くない、このことは李陵詩が世に埋もれていたことの保證となるだろう。換言すれば、顔延之の時期に至って李陵詩は發見され、ようやく文人たちの注目を集め始めたのである。

- 劉勰『文心雕龍』明詩篇：孝武愛文、柏梁列韻、嚴馬之徒、屬辭無方。至成帝品錄、三百余篇、朝章國采、亦云周備。而辭人遺翰、莫見五言。所以李陵・班婕妤見疑後代也。[7]
- 鍾嶸『詩品』總論：逮漢李陵、始著五言之目。[8]
- 蕭子顯『南齊書』文學傳論：少卿（李陵の字）離辭、五言才骨、難與爭鶩。[9]
- 裴子野「雕蟲論」：其五言爲家、則蘇李自出。曹劉偉其風力、潘陸固其枝葉。[10]

このような經緯を見ると、劉宋の顔延之において初めて現れた李陵詩（また蘇武詩）に關する言及は、南齊から梁代には着實に增加し、もはや特殊な發言ではなくなっている。とりわけ『文心雕龍』のような綿密な構成を備えた體系的著作が李陵詩を取り上げて論じていることは、特に注目に値する。すなわち當時すでに、李陵詩に關する知識が一部の好事家のものではなく、すでに多くの人に周知せられた、またそれ故

に當然論ずべき對象として成熟していたことを示している。また『南齊書』のような權威を志向する史書が李陵詩を取り上げてるのも、同樣である。要するに、劉宋の顏延之の時期に發見された李陵詩は、齊梁時期になると「五言の鼻祖」と位置づけられ（鍾嶸）、源泉的な古典としての地位を次第に確立してゆく[11]。またその一方において、「突然出現した源泉的古典」に對してその眞僞に懷疑的な見解が提示されるのも（顏延之・劉勰）、ことさら異とすべきものではない。蘇李詩に權威を認め、また反對にその權威を否定する意見も含めて、要するに、蘇李詩の出現はこの時代に驚異の念をもって迎えられたのである。

（三）蘇武詩の實作に對する影響

「蘇李詩」が詩人たちの實作に影響を與えたとすれば、正しくこの齊梁時期にこそ始まると推測して相違ない。

「蘇李詩」（逯欽立の數え方で二二首）の中で最もよく讀まれたのは、『文選』の後世における壓倒的な通行性を考えれば、卷二七所收の李陵「與蘇武詩三首」と蘇武「詩四首」であることは間違いない。しかも『文選』の編集そのものが、當時の作品評價（その中には眞僞判定や、通行性という名の評價を含む）を根據としている以上、ここに所收の七篇は、『文選』編集に先立つ一時期（梁前半期、遡れば南齊期まで）の「蘇李詩」の享受情況を多面的に反映していると考えて良かろう。

いま便宜的に、中でも特に廣汎に享受されたと判斷される「携手上河梁」詩（「與蘇武詩三首」其一）について、それが如何に典故として魏晉南北朝期の詩に影響を與えたかを檢討してみたい。*

＊「携手上河梁」詩が注目されるのは、次ぎに論ずるように、詩中の「河梁」の語がこの詩を典據に、齊梁以後の多くの詩に用いられているからでる。また賦得體の詩にも陳、江總「賦得携手上河梁應詔詩」があって、當時の詩人には蘇李詩中の注目の詩篇であったことが裏付けられるからである。

なおほぼ同樣の事情が「黃鵠一遠別」詩（「蘇武詩四首」其二）[12]についても言える。すなわち詩中の「黃鵠」の語はしばしばその後の詩に用いられ、しかも陳、阮卓「賦得黃鵠一遠別詩」も存在している。蘇李詩に關わる賦得體詩は、逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』に據れば、この江總と阮卓の二篇以外には、陳、劉刪「賦得蘇武詩」があるのみだが、しかしこの劉刪詩は、蘇武詩を漠然と意識するのみで、特定の詩篇を念頭に置く賦得體詩ではない。つまり「携手上河梁」詩と「黃鵠一遠別」詩が、その通行性ないしは知名度という點で

蘇李詩中に特別の位置を占めていたことを示している。しかし「黃鵠一遠別」詩は、蘇李詩の影響を測る尺度として、「携手上河梁」詩ほどに有效ではない。何故ならば、「黃鵠」の語は、この詩（後漢末期）以上に古く、しかも規範性も併せ持つ作例が存在するため、[13]この詩を典據としたか否かの判定がはなはだ困難だからである。

「携手上河梁」詩は、次のようである。

携手上河梁　手を携えて河梁に上る
遊子暮何之　遊子　暮れに何(いづく)くにか之く
徘徊蹊路側　徘徊す　蹊路の側
悢悢不能辭　悢悢として辭する能はず
行人難久留　行人　久しく留まり難く
各言長相思　各の長く相ひ思うを言う
安知非日月　安んぞ日月に非ざるを知らんや
弦望自有時　弦望　自(おのづか)ら時有り
努力崇明德　努力して明德を崇(たか)めよ
皓首以爲期　皓首　以て期(あふとき)と爲さん

この詩では、「河梁」の語が注目の語となる。「河梁」は、正しく蘇李兩者の離別の場所である。しかもこの語は、恐らくは他ならぬこの詩を典據として、齊梁以後の多くの離別詩に用いられることになる。

①牽牛織女遙相望　牽牛織女　遙かに相ひ望む
爾獨何辜限河梁　爾(なんじ)獨り何の辜(つみ)ありてか河梁に限らる
（魏、曹丕「燕歌行二首」其一）

②思歸引　歸河陽　歸るを思うの引　河陽に歸る
假余翼鴻鶴高飛翔　余に翼を假し　鴻鶴とともに高く飛翔せん
經芒阜　濟河梁　芒阜を經て　河梁を濟(わた)り
望我舊館心悅康　我が舊館を望みて心は悅康す
（西晉、石崇「思歸引」）

③瞻言媚天漢　瞻(みる)て言へらく　天漢媚(うつく)しく
幽期濟河梁　幽期　河梁を濟らんと
服箱從奔軺　服箱　奔軺に從がひ
紈綺闕成章　紈綺　成章を闕く
（劉宋、孝武帝劉駿「七夕詩二首」其一）

以上の劉宋を下限とする三篇には、李陵「携手上河梁」詩の「河梁」の影響をまだ見出だすことはできない。①③は、七夕傳說を詠じたものであり、「河梁」は、牽牛と織女とを

隔てる銀河に架かる梁を指している。つまりこれらの「河梁」は、李陵詩とは無關係に、一義的には七夕傳説に由來する語と判斷される。

また②は、石崇が官を辭して河陽（黄河の北岸）にある別業に歸る時の制作であり、「芒阜（北邙山）」を越え、「河梁」を濟るというときの「河梁」は、文字通り、黄河を北に濟るときの渡しを意味している。こうしてこの三例の「河梁」は、李陵詩とは無關係の用法と確認して良かろう。

ところが南齊以降になると、この語の大部分の用例に、「携手上河梁」詩の影響が認められるようになる。

④徘徊將所愛　徘徊　愛する所を將（ひき）ゐる
惜別在河梁　別れを惜しみて河梁に在り
衿袖三春隔　衿袖　三春に隔たり
江山千里長　江山　千里に長し
（王融「蕭諮議西上夜集詩」）

⑤東風柳線長　東風　柳線長く
送郎上河梁　郎を送りて河梁に上る
未盡樽前酒　未だ樽前の酒を盡くさざるに
妾淚已千行　妾の淚　已に千行
（范雲「送別詩」）

⑥新知關山別　新知　關山に別れ
故人河梁送　故人　河梁に送る
置此一函書　此の一函の書を置きて
爲余達雲夢　余の爲に雲夢に達せよ
（吳均「別夏侯故章詩」）

⑦軫軫河梁上　軫（しん）軫たり河梁の上
紛紛渭橋下　紛紛たり渭橋の下
爭利亦爭名　利を爭い　亦た名を爭い
驅車復驅馬　車を驅り　復た馬を驅る
寧訪蓬蒿人　寧ぞ蓬蒿の人を訪ねんや
誰憐寂寞者　誰か寂寞の者を憐れまんや
（王僧孺「落日登高詩」）

⑧鬱鬱陌上桑　鬱鬱たり陌上の桑
盈盈道傍女　盈盈（えい）たり道傍の女
送君上河梁　君を送りて河梁に上り
拭淚不能語　淚を拭（ぬぐ）ひて語る能はず
（王臺卿「陌上桑四首」其一）

⑨故人形影滅　故人　形影滅し

音書兩俱絕　遙看塞北雲
懸想關山雪　遊子河梁上
應將蘇武別

音書　兩つながら俱に絕ゆ
遙かに看る塞北の雲
懸かに想ふ關山の雪
遊子　河梁の上に
應に蘇武と別れんとす

（庾信「擬詠懷詩二十七首」其十）

⑩開窗對高掌　窗を開きて高掌に對し
平坐望河梁　平坐して河梁を望む
歌響聞長樂　歌響　長樂を聞き
鍾聲徹建章　鍾聲　建章に徹る

（庾信「登州中新閣詩」）

⑪薛君一狐白　薛君は一狐白
唐侯調驌驦　唐侯は驌驦を調ふ
寒關日欲暮　寒關　日暮れんと欲し
披雪渡河梁　雪を披いて河梁を渡る

（庾信「郊行値雪詩」）

⑫鳳吹臨伊水　鳳吹　伊水に臨み
時駕出河梁　時に駕して河梁を出づ
野燎村田黑　野燎　村田黑く
江秋岸荻黃　江秋　岸荻黃ばむ

（徐陵「新亭送別應令詩」）

⑬奉使窮沙漠　使いを奉じて砂漠を窮め
抆淚上河梁　淚を抆ひて河梁に上る
食雪天山近　雪を食らひて天山近く
思歸海路長　歸るを思ひて海路長し

（劉刪「賦得蘇武詩」）

⑭河梁望隴頭　河梁に隴頭を望み
分手路悠悠　手を分かてば路悠悠
徂年驚若電　徂年　驚くこと電の若く
別日欲成秋　別日　秋と成らんと欲す
黃鵠飛飛遠　黃鵠　飛び飛びて遠く
青山去去愁　青山　去り去りて愁ふ

（江總「別袁昌州詩二首」其一）

⑮自君上河梁　君の河梁に上りし自り
蓬首臥蘭房　蓬首　蘭房に臥す
安得一樽酒　安んぞ一樽の酒を得て
慰妾九廻腸　妾の九廻の腸を慰めん

（陳少女「寄夫詩」）

⑯漢虜未和親　漢虜　未だ和親せず
憂國不憂身　國を憂ひて身を憂へず

握手河梁上　手を握る河梁の上
窮涯北海濱　涯を窮む　北海の濱（ほと）り
（楊素「出塞二首」其二）

南齊から隋に至るこれら十三篇を通覽するとき、離別の詩が多くを占めていることが分かる（④⑤⑥⑫⑭⑮）。また樂府であっても、男女の離別を主題とするものもある（⑧）。また蘇武李陵の離別の故事に直接取材したものもある（⑨⑬⑯）。こうした離別の主題と関わる詩はすべて十篇、それは十三篇中の大部分を占めている。

もっともその一方に、離別とは無關係に「河梁」の語を用いた詩が存在するのは（⑦⑩⑪）、むしろ至って自然なことと言うべきであろう。「河梁」は、河に架かった橋梁のことであり、それ自體は、離別との固有の關係を持つような特殊な用語ではない。河のあるところでは、日常的に存在するものである。かくしてそれは、渭水に架かる橋梁となり（⑦）、新築の高樓から望まれる橋梁となり（⑩）、郊外に遊んで雪に降られたときに友人たちと凍えながら渡った橋梁となる（⑪）。それ故ここで注目しなければならないのは、「河梁」の語が、このように普通の景觀を描く中に現れうるにも拘わらず、しかし實際には離別の詩に集中して現れるという極端な偏向である。この事實は、その背後に共通の典據が意識されていることを意味しており、その典據とは、ほぼ確實に李陵「携手上河梁」詩に他ならないであろう。

もう一點。顔延之「庭誥」に約半世紀遲れて、實作（④王融「蕭諮議西上夜集詩」は南齊の永明八年490の制作）の分野でも李陵詩の影響が顯在化しているという時間差に注目したい。この半世紀の遲れは、客觀的な知識としてのみ認識されていたものが、實作を通して血肉化するのに要した時間である。—因みにこの王融詩と略ぼ時を同じくして劉勰『文心雕龍』に李陵詩が言及されたことも、もとより偶然ではあるまい。この周到で體系的な著作においては、言及すべき作者と作品の選擇は、恣意的で偶然的なもの、ではあり得ない。李陵詩が、實作の場に影響を與えるほどに詩人の中に浸透するという李陵詩享受の深化が、『文心雕龍』の李陵詩に關する言及を催したと考えることができよう。

（四）「蘇李詩」の實作に對する具體的影響

南齊以降の詩の實作に、また特に離別詩のそれに、李陵詩の影響が及んでいることは、前節で確認した。次ぎに論ずべ

きは、影響の具體相が如何なるものであったかである。

そのとき留意すべきは、いわゆる蘇李詩の提示する世界が、史的「眞相」（第一節參照）、つまり朔漠を舞臺にした、もはや再會を期しがたい悲痛で切迫した離別と、必ずしもその情況を一致させていないことである。また加えて、詩篇相互においても多くの矛盾を含んでいることである。

ところで離別の史的「眞相」と、蘇李詩が描く世界との矛盾は、地理的關係・人的關係など、その方面は多岐に渡る。いま先ず、地理的な矛盾點を確認してみよう。『文選』所收の七篇の「蘇李詩」に就いてみれば、荒涼とした朔漠の離別に相應しくない景物が、少なからず詠み込まれている。

・携手上河梁、遊子暮何之。（李陵「與蘇武詩三首」其二）
・臨河濯長纓、念子悵悠悠。（李陵「與蘇武詩三首」其三）
・仰觀江漢流、仰視浮雲翔。……山海隔中州、相去悠且長。（蘇武「詩四首」其四）

前節で取り上げた「河梁―河にかかった梁」は、もとより朔漠の離別に相應しいものではない。まして「臨河濯長纓」という豊かな水を蓄える河のイメージがそれと無緣であるのは言うまでもない。

このような矛盾を說明するために文選五臣注の一人李周翰は、李陵「與蘇武詩三首」の題下に「（蘇）武將使匈奴、故贈此詩」と注し、離別の地點を長安に比定して、蘇武が使者として匈奴に赴くときに、友人の李陵が長安で彼を送別したときの作と解釋する。すなわち「河梁」「臨河濯長纓」は、渭水（廣義には黃河水系）を指すと見るのである。これは、地理的な矛盾を解消するための苟且の解釋ではある。しかしこの解釋も「仰觀江漢流……山海隔中州」については完全に破綻せざるをえない。「江漢」は、蜀中の河川を言うものであり、「山海」に至っては、なおさら長安とは遠く隔たった地理である。

矛盾は、こうした地理關係ばかりではなく、離別の當事者相互の人間關係にも及んでいる。

・骨肉緣枝葉。結交亦相因。四海皆兄弟。誰爲行路人。（蘇武「詩四首」其一）
・結髮爲夫妻。恩愛兩不疑。（蘇武「詩四首」其三）

「骨肉」は血緣を前提とする表現であり、蘇李の關係には似つかわしくない。また「結髮爲夫妻」は、それを如何に親密な兩者の譬喩と解釋しようとしても、男性同士の、しかも漢と匈奴との紛爭を情況とする兩者の政治的な離別を言うには、不似合なものである。

以上は矛盾の突出したものを例示したが、總じて、蘇李詩と史的眞相との懸隔は余りにも大きい。李陵詩に對する最初の言及者となった顔延之が、すでに「總雜不類、元是假託、非盡（李）陵制」と評しているのは、正しく公平の論と言うべきである。(14)

蘇李詩の描く世界は、史的眞相と矛盾するばかりではなく、そこに集められた詩篇相互にも多くの矛盾を抱えた、多様で雜駁な離別詩の集合體である。しかしそれが蘇李の眞作と信じられ、享受されたときには、その雜駁さも却って豊かな多様性として活きてくる。もし假に、蘇李詩が朔漠での切迫した離別という史的眞相を一元的に反映した作品群であったならば、溫暖な江南の自然風土と、優雅な修辭的洗練を競う當時の南朝の文學風土の中に置かれたとき、詩人たちの離別詩の制作と殆ど接點を持ち得なかったであろう。

離別詩は、劉宋の鮑照によって、その後に繼承される基本的樣式が形成される。(15)離別が、詩の重要な主題の一つとして認知されるのは、鮑照以後のことと考えて良い。その鮑照の離別詩には「蘇李詩」の明らかな痕跡を確認することはできないが、(16)恰もこの時期を境にその詩が人々の耳目を惹き始めたことは、離別詩の形成に對して、積極的な觸媒效果をもたらしたと見ることができるだろう。――次ぎに、「蘇李詩」が齊梁以後の離別詩に及ぼした影響を、簡單に整理しておきたい。

第一に、また最も重要な影響は、離別というまだ傳統の確立していない新しい主題に、古典的な據り所＝權威（蘇李詩は前漢の作と信じられた！）を提供したことである。繰り返せば、魏晉時期に、離別詩は寄贈や公讌に遲れて、ようやく萌芽し始めた主題に過ぎなかった。その後、劉宋の鮑照に至って離別詩は基本的樣式を形成しつつあったが、彼自身は當時なお、その分野の孤立した先驅的作家に過ぎなかった。そして南齊以後、離別の主題の下に多くの作品が蓄積され始めたとき、(17)彼らの眼前に「離辭―離別の詩」（蕭子顯『南齊書』文學傳論）と概括される多數の蘇李詩が俄かに出現したことは、離別という主題の定着を促し、離別詩の制作を促す積極的な刺激となったに違いない。

第二に、離別と閨怨との關係を積極的に取り持ったことである。蘇武「詩四首」其二の「結髮爲夫妻」詩(18)は、夫の出征を控えての夫婦の離別を詠じた詩篇である。南齊以降、離別詩は閨怨的發想と接近するが、そのとき夫婦の離別を主題と

するこの蘇武詩の存在は、優れた啓示となったであろう。

送別詩　　送別詩　　范雲
東風柳線長　東風　柳線長く
送郎上河梁　郎を送りて河梁に上る
未盡樽前酒　未だ樽前の酒を盡くさざるに
妾淚已千行　妾の淚　已に千行

この詩は、郎と妾との離別を主題とする閨怨詩である。「上河梁」の用語は、上述のように李陵「携手上河梁」詩の影響を最も明瞭に示す證據である。ただしいわゆる蘇李詩がその中に閨怨的詩篇を含まなかったとすれば、范雲のこの閨怨詩と接點を持つこともなく、結果として「上河梁」の用語の援用もあり得なかったはずである。蘇李詩が閨怨詩に働きかけるとき、「結髪爲夫妻」詩がその影響の仲立ちをしたことは確かであろう。

また次の詩も、前詩とほぼ同様の事情にある。

陌上桑四首其一　　陌上桑　　王臺卿
鬱鬱陌上桑　鬱鬱たり陌上の桑
盈盈道傍女　盈盈たり道傍の女
送君上河梁　君を送りて河梁に上り
拭淚不能語　淚を拭ひて語る能はず

この二篇の閨怨的離別詩は、閨怨詩の歴史に新しい試みを加えたものである。すなわち、傳統的な閨怨詩は、離別から既に久しい時間が經過した情況を設定して、女性の男性に對する怨望の思いを抒べるのが基本である。それに対してこの二篇が、離別のただ中に情況を設定しているのは、從來類例を見ないものである。この閨怨詩の新しい趣向には、蘇武「結髪爲夫妻」詩の影響を想定して良かろう。(19)

(五) 結語

六朝期における離別詩の形成を考えるとき、蘇武詩が如何なる形でそこに影響を與えたかを檢討することは、不可缺の作業である。何故ならば、蘇李詩が蘇武李陵の離別詩の眞作と認識されるところでは、前漢中期の成立という古さと、五言詩の嚆矢という文學史的評價とが相俟って、源泉的な古典としての權威を持ったはずだからであり、またその限りにおいて、魏晉以降の離別詩の形成にも大きな影響を與えたこと

を想定しなければならないからである。

蘇李詩の具體的な影響は、差し當たり二つに分けることができる。第一は、用語次元での影響である。南齊以後の離別詩に、離別の地點としてしばしば「河梁」が選ばれることになるのは、端的に、李陵「携手上河梁」詩を踏まえた結果と考えられる。また同様に「黃鵠」が離別の象徴として定着することにも、蘇武「黃鵠一遠別」詩が一定の影響を与えているだろう。第二は、蘇武「結髮爲夫妻」詩が仲介となるところで、從來はそれぞれ異なる主題としてあった離別と閨怨との接近が、實現されたことである。齊梁期以降、詩文學一般に男女の性愛に對する關心が深まる中で、閨怨との接近を實現した離別詩は、一層の發展の手掛かりを得たことになる。

もっとも、蘇李詩のより重要で本質的な影響は、離別という比較的新しい主題に、古典的な根據を與えたこと、つまり離別という主題の成熟と定着に積極的な刺激となったことであろう。しかしその點を考慮に入れたとしても、しかし蘇李詩が與えた影響は、やはり限定的なものであったとしなければならない。すなわち蘇李詩の存在が詩人たちの意識に上り始めたのが劉宋の中期であり（顏延之「庭誥」）、離別詩の實作に影響が及び始めたのはさらに下って南齊時期を待たなければならなかった。一方、離別詩は、魏晉以來の萌芽期を經て、劉宋の鮑照に至って略ぼ基本的な樣式を形成していた。すなわちこれ以後に發生した蘇李詩の影響は、もはや、離別詩の形成に一義的な重要性を持つことはなかったからである。

注

（1）「蘇李詩」の成立に關わる從來の研究を要領よく整理しているのは、「蘇李詩文辨僞」（劉躍進『中古文學文獻學』江蘇古籍出版社、一九九七年）である。ここでは蘇李の眞作であることを否定した上で、成立時期については特に結論を記すことなく、①後漢末の靈帝・獻帝の時期、②曹魏の時期、③兩晉交替の時期の三說に整理している。なお後述するように、本稿ではさしあたり、①の說を採る逯欽立の所說を穩當と考える立場にある。

（2）蘇武李陵詩を眞作と見る最近の成果は、章培恆・劉駿「關於李陵《與蘇武詩》及《答蘇武書》的眞僞問題」（『復旦學報』社會科學、一九九八年第三輯）

（3）漢魏以前の無名氏の詩群が、特定個人の名の下に傳承される例は他にもある。例えば、『文選』に「古詩十九首」と稱される詩篇の多くは、「枚乘詩」として傳えられていた。

（4）早稻田大學の古屋昭弘氏の敎示に據れば、「黃鵠一遠別」詩（『文選』蘇武詩）と「童童孤生柳」詩（『古文苑』「錄別

詩」）の押韻について、魏晉に先立つ古い時期の特徴を備えているとのことである。具體的には、前者の韻字「徊・乖・懷・哀・摧（魏晉の皆部。部の名称は丁邦新に拠る）」と「依・悲・歸・揮・飛（魏晉の脂部）」とは、魏晉時期にはすでに押韻しにくく、齊梁時期にはなおさらその傾向が強まる。また後者の韻字「泥・懷（魏晉の皆部）」と「衣・飢・湄・肌・悲・遲（魏晉の脂部）」についても同様である。

（5）『芸文類聚』三一「人部・別下」に載せる三篇の蘇李往復書簡「漢李陵与蘇武書」「漢蘇武報李陵書」「李陵重報書（『文選』四一題作「答蘇武書一首」）」は、後人によって史実に符合するように作為された明らかな「偽作」である。この点で、蘇李詩が、すでに存在していた詩篇の作者をその後になって蘇李に比定した「偽託」であるのと、事情が異なる。とは言え、異なる成立の経緯を持つ蘇李詩と蘇李往復書簡が、ともに『文選』に初出していることは興味深い。つまりこの事実は、「蘇李の離別」が、斉梁時期ににわかに注目されるようになったことを裏付ける重要な情況証拠となるだろう。―なお蘇李往復書簡が偽作とされる根拠として、①『漢書』の伝える史実とよく符合するばかりか、表現にも踏襲した形跡があること、②修辞的には四字句を多用し、また対偶表現に富むなど、前漢時期の文体とは異質であること、③『漢書』にこれら書簡についての言及や引用が見られないこと、等。

（6）『文選』に「古詩十九首」として収められる無名氏の古詩については、すでに西晉、陸機の「擬古詩十二首」以後、模擬詩が作られている。

（7）『文心雕龍』の成立は、通説では南齊の末期、永泰元年（四九八）ないしは中興二年（五〇二）とされる。

（8）『詩品』の成立は、梁の天監（五一三）以後の數年間。

（9）蕭子顯は大同元年（五三五）に卒しており、『南齊書』の成立はこれ以前。なお梁の大通元年（五二七）以後に成立する裴子野「雕蟲論」と蕭統『文選』は蘇李の二人を取り上げる。この點を考慮すれば、李陵のみを取り上げる『南齊書』の成立は、兩者よりも早い可能性が高い。

（10）「雕蟲論」は、李陵のみならず蘇武にも言及することで注目される。なおこの序の末尾に、「梁鴻臚卿裴子野論曰」とある。裴子野が鴻臚卿となったのは、梁の大通元年（五二七）であり、「雕蟲論」の成立はこれ以降となる。これが蘇武と李陵の詩を採錄する『文選』成立（大通二年前後）と相い前後する時期であることは、偶然ではあるまい。

（11）南北朝後期から隋唐へと、一般的なレベルでは、「蘇李詩」を眞作とみる立場が地歩を得てゆく。一例として、杜甫「解悶十二首」其五に「李陵蘇武是吾師」。

（12）「黃鵠一遠別。千里顧徘徊。胡馬失其羣。思心常依依。何況雙飛龍。羽翼臨當乖。幸有絃歌曲。可以喩中懷。請爲遊子

吟。泠泠一何悲。絲竹厲清聲。慷慨有餘哀。長歌正激烈。中心愴以摧。欲展清商曲。念子不得歸。俛仰內傷心。送不可揮。願爲雙黃鵠。送子俱遠飛。」

（13）「烏孫公主細君」（『漢書』西域傳）に、「吾家嫁我兮天一方、遠託異國兮烏孫王。廬爲室兮旃爲墻、以肉爲食兮酪爲漿。居常土思兮心內傷、爲黃鵠兮還故鄉」。また「黃鵠歌」（前漢、劉向『列女傳』巻四）に、「黃鵠之早寡兮、七年不雙。鵁頸獨宿兮、不與衆同。夜半悲鳴、想其故雄。天命早寡兮、獨宿何傷……」。――この二篇に見える「黃鵠」は離別の象徴に他ならず、この點で「黃鵠一遠別」詩の「黃鵠」と含意を一にし、しかも成立時期を考えると、この二篇の方が先行している（本稿では、蘇李詩は後漢末期の成立とする逯欽立の見解に從う）。

（14）逯欽立「漢詩別錄―（辨僞第一）蘇李詩」に、「夫此組別詩、固非一人一時之作、此觀其籠雜之內容、自足默識。而『古文苑』之標題「錄別」、則尤甚吟味」――つまり『古文苑』に言う「錄別」とは「離別詩の採錄」のことであり、ここに李陵・蘇武の名を明記していないのは、後世「蘇李詩」と稱されることになるものが、當初はその實、無名氏の手になる離別詩の雜集であったことを示唆している。

（15）參照：「六朝期における離別詩の形成（上）―鮑照による離別詩の發見」（『中國詩文論叢』第九集、一九九〇年）

（16）鮑照「與荀中書別」詩の「暫無黃鶴翅、安得久相從」に錢振倫『鮑參軍集注』（上海古籍出版社、一九八〇年）が注して「蘇武古詩：願爲雙黃鵠、送子俱遠飛」の典據を擧げるのは、從いがたい。「黃鵠（しばしば黃鶴と混同）」が離別の常套的譬喩となるのは、後漢末期の「蘇李詩」成立以前からの傳統である。なお注12參照。

（17）參照：「六朝期における離別詩の形成（中）―永明期における離別詩の競作を手掛かりとして」（『中國詩文論叢』第十集、一九九一年）

（18）「結髮爲夫妻、恩愛兩不疑。歡娛在今夕、燕婉及良時。征夫懷往路、起視夜何其。參辰皆已沒、去去從此辭。行役在戰場、相見未有期。握手一長歎、淚爲生別滋。努力愛春華、莫忘歡樂時。生當復來歸、死當長相思。」

（19）離別と閨怨との接近は、從來にない新しい形の離別詩を生んだ。すなわち男性同士の離別を主題とする詩であるにも拘わらず、その哀傷を、男性と離別した女性の纏綿たる哀傷に擬えて表現する新種の離別詩の出現である。注16所揭論文の第五、六節を參照。

［附記］

冨谷至『ゴビに生きた男たち――李陵と蘇武』（白帝社、一九九四年）に拠れば、李陵をもって悲劇の英雄と見る「李

陵悲話」は、三国を経て、劉宋時期にほぼ形成された。同書の所説を、三条の史料に即して要約する。

①西晉末の劉琨の「扶風歌」（『文選』二八）に、「惟昔李騫期、寄在匈奴庭。忠信反獲罪、漢武不見明――惟昔（むかし）　李（陵）期を騫（あやま）り、寄（やど）りて匈奴の庭に在り。忠信　反って罪を獲、漢武に明（はら）されず」。ここには、「武帝＝暴君」「李陵＝悲劇の英雄」とする評価が萌芽している。

②漢武用虚罔之言、滅李陵之家、劉主拒諫司所執、宥黄權之室、二主得失縣邈遠矣。（『三国志』蜀書「黄權伝」に対する劉宋、裴松之の注）。――劉備は、司直の主張を退けて、魏の曹操に寝返った黄權の家族を宥した。これは虚罔の言を信じて李陵の家族を処刑した漢武の横暴さと、雲泥の差である。こう述べる裴松之において、①の劉琨の主張はさらに明確化されている。

③四〇五年、敦煌を支配する西涼国の李暠（字は玄盛）は、舎人の黄始と梁興間を東晋に遣わして臣事の意向を表明し、遅れて四一八年、東晋は李暠の子の西涼王李歆を冊封した（『晋書』八七「李玄盛伝」）またその後、劉宋の武帝劉祐は、引き続き西涼王李歆を冊封した（『宋書』九八「氐胡」）東晋の末から宋にかけて、はるか西陲の敦煌から臣下の礼をとる西涼の李暠父子、それは華北奪回を願う江南の流寓王朝にとっては貴重な存在だった。――この隴西李氏に属する李暠父子は、李陵の末裔に当たるのである。

これらの史料を踏まえつつ、冨谷氏は結論付ける。「西涼の存在、そこで躍躍する隴西の李氏は、南朝の漢人たちにとって果たせない夢をかえてくれる英雄と映ったであろう。そしてその李玄盛（李暠の字）はかつて漢の武帝時代、あの強敵匈奴と挑んでいった漢の飛将軍李広、その孫李陵の子孫であった。李陵のことは、南朝の人たちは、『漢書』などで読み、又語り伝えられてきたもの、ここに英雄李玄盛が出現したことによって、李陵に対してその人々の見方もより想像的なもの、悲劇の英雄として形づくられていく。それが李陵悲話であり、その成立は五世紀南朝宋の時代であった」（同書二五七頁）

冨谷氏は、李陵の英雄化が――一方にある漢武帝の評価の低下と対応しながら――どの様に進行し、どの時点で成立したかを論じているが、その結論として示された劉宋の時期が、恰も李陵詩に初めて言及した顔延之「庭誥」の成立時期（元嘉十一年（四三四）以後の七年間）と一致しているのは偶然ではあるまい。本稿において、蘇武李陵詩の影響が劉宋の時期から顕在化すると論じたことは、ここに有力な補強材料を得たことになる。